

## 学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	山下 暁子 【比較社会文化学専攻 平成22年度生】	<p>この論文は、20世紀を通じて、タイの音楽家として活動した、プラシッド・シラパバンレンについて、これまで、ほとんど語られることのなかった、伝統的なタイ音楽の実践者としての側面を、明らかにしている。</p> <p>音楽学研究におけるプラシッドへの言及は、基本的に西洋音楽の作曲家として先駆的であり、西洋音楽を学ぶために日本に留学した人物として語られてきている。その一方で、タイを訪れた民族音楽学者のインフォーマントとなり、タイの伝統音楽についての情報源ともなっていた。また、基本的に西洋音楽の作曲家であるため、研究方法も楽曲分析が主となりがちであった。日本での滞在中も東京芸大の作曲家、プリングスハイムへの師事が目的であったように記されてきた。</p> <p>こうしたプラシッドのいわば「語られ方」に対して、申請者はタイでの現地調査の結果、大きな偏りがあることを見出し、欠落している部分を埋めるための一次資料を調査した。一つは、プラシッドの子息であるクルトーン氏からの情報収集、もう一つは、クルトーン氏の自宅に残るプラシッド関係の資料調査である。その結果、大きく二つの事実が浮かび上がってきた。第一に、プラシッドの来日は留学のためではなく、シャム国立舞踊音楽学校舞踊団の引率者としてであり、これが国家レベルでの大きな行事であったことである。第二に、パカワリー舞踊音楽学校（PIDM）の創設とその海外公演によって、タイの伝統的な舞踊と音楽を実践していたことが、明らかとなった。</p> <p>この論文はプラシッドというタイを代表する音楽家がどのように語られるかを、事実に基づいて検証し、近代の音楽学がもつ西洋音楽への偏向と、タイ人自らも語らず、また外部の研究者も語らない伝統音楽の特性とを明らかにし、タイ音楽を考える一つのモデルを提起した。</p> <p>審査委員会は2回開催され、目的と結論の橋渡しと、資料などの説明がわかりにくいのを、より丁寧に記述すること、などが指摘された。</p> <p>8月31日に公開発表会を行ない、プラシッドの独自性やタイ人からの見方など、有益な議論が交わされた。最終試験を経て、本審査委員会では、全員一致で本論文が本学の、博士（人文科学）Ph.D. in Musicology に相応しいことを判断した。</p>
論文題目	プラシッド・シラパバンレン（1912-1999）の研究 - タイ音楽の実践者としての活動 -	
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	准教授 中村 美奈子	
	助教 井上 登喜子	
	助教 福本 まあや	
	聖徳大学教授 徳丸 吉彦	
インターネット公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（可・否）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む イ. 著作権や個人情報に係る制約がある ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	

